

---

# バカと軍事オタクと召喚獣

アゲハ蝶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカと軍事オタクと召喚獣

### 【Nコード】

N1588Z

### 【作者名】

アゲ八蝶

### 【あらすじ】

この物語は明久Aクラスです。Fクラスがめちゃくちゃ空気になってます。それと中坊が書いています。それが嫌な方は読まないことをおすすめします。多分不定期更新です。

## オリキャラ設定1（前書き）

この物語は、作者の趣味全開で書いています。それが嫌な方、またはついていけない気がしない、という方はブラウザボタンの戻るをクリック。ですが一応説明は書くつもりです。

## オリキャラ設定1

### 設定

・石井拓馬いしいたくま

173cm 中肉中背

趣味：ゲーム（FPS、レースゲーム）

2つ名：現代に蘇った山本五十六

好きなもの：銃、戦闘機、軍艦（第二次大戦の時の物）、甘いもの

嫌いなもの：虫、辛いもの、苦いもの

得意科目：日本史、世界史、現代国語（430〜620点）

苦手科目：保健体育、古典、英語W（150〜220点）

・本作品の主人公。木下家や明久とは幼馴染みで、料理が出来るが明久には負ける。

姫路の料理を食べても少し手足に力が入らなくなるぐらいで済むくらい体が丈夫。

性格は優しいが一度戦闘が始まると優子や秀吉たちが止めない限り戦闘狂になる。基本は怒らないが明久たちが傷つけられると一気に凶暴になる。成績はAクラス上位に入る程で、教えるのも上手く、その実力は明久と秀吉をAクラスに入れる程。銃エアガンを持ってきていて、それを使用した時の実力はFFF団を10分で制圧出来る程だが、武器がないと秀吉にすら負ける。知略に富んでおりその実力は雄二と互角。

・召喚獣

姿は第二次大戦の時の日本海軍と一緒

武器：M1ガーランド、M1A1トンプソンの内のどちらか1つと無反動砲1つ

ガーランド、トンプソン：リロード一回につき二点消費、無反動砲

一回につき10点

腕輪（一対一の時は使用不可）：航空支援・・・五分に一回使用可

点数の半分を消費。最高でも単教科で

200点、総合科目で2600点まで消費する。機銃掃射・・・一回につき100点分の攻撃力がある。全部で五回出来る。爆撃・・・一回だけ出来る。500点分の威力と半径2mの加害範囲がある。

機甲師団・・・二分に一回使用可。点数の約三分の一を消費する。

一回につき十発、全部で五台出現、一発につき十点分の威力と半径75cmの加害範囲がある。

艦砲射撃・・・十点だけ残して他の点数をすべて消費する。一発につき450点分の威力と半径5mの加害範囲がある。一回につき8～12発、三回撃つことが出来る。射程が新校舎の端から旧校舎の端まであるが水のそばでないと使えない。（トイレや水道など）

## オリキャラ設定1（後書き）

主人公が若干チートな気もするが気にしたら負けだと思っている。

質問：みなさんの一番好きな授業といえは？作者は社会（歴史）が好きです。

こんな小説で大丈夫か？や一番いい小説を頼む。とか、そういう意見やダメ出しをしてもらえるところらしいです。

## 第一問（前書き）

バカテストは基本しません。

## 第一問

オレらがこの文月学園に入学してから二度目の春が訪れた。

今オレらの頭は今年一年を共に戦い抜いていく戦友と教室…まあ要するに新しいクラスのこと一杯になっていた。

「吉井、木下、石井、遅刻だぞ」

玄関の前でドスのきいた声に呼び止められる。

この声は、まさかッ！スネー…もとい、鉄人ではないか！

「西村先生おはようございます」

「西村先生おはようなのじゃ」

「鉄じ…西村先生おはようございます」

「スネ…鉄人おはようございます」

「木下、おはよう。それと石井と吉井、今鉄人と呼ばなかったか？」

ちっバレたか。ならこは「ははっ気のせいですよ」

これでどうだ！

「えっ違うんですか？」



「吉井ですら知っていることも知らんのか!？」

うん、やっぱり人をいじるのは面白いな。

「ジョーダンですよ」

「まあいい。四人とも他に言う事はないのか？」

「西村先生遅れてすみません」

「西村先生遅れてすまぬのじゃ」

「「今日も肌が黒いですね」」

「お前らは遅刻の謝罪よりも俺の肌の色の方が重要なのか」

ぬぬ、違うとな？ならば何だというのだ

「そつちでしたか、すみません」

「そつちか」

「まあいい。ほら、振り分け試験の結果だ」

「「「「「ありがとうございます(なのじゃ)」」」」」」

「ところで吉井に木下弟、どうしたんだ一体？」

「「何かあったんですか？(あったのかの?)」」

「俺は五回も答案を見直したが間違いはどこにもなかった。二人ともまさかカンニングでもしたのか？」

「そんな事しませんよ。という事は……」

「ああ、二人ともAクラス入りだ。おめでとう」

「本当ですか？」

「疑うならこの封筒の中を調べてみる」といって渡された封筒の中に入っていた紙を見るとそこにはでかかところ書かれていた。

「石井拓馬、Aクラス」「木下優子、Aクラス」「木下秀吉、Aクラス」「吉井明久、Aクラス」

四人の幼馴染みの最高クラスでの生活が今幕を開けた。

## 第二問（前書き）

評価とお気に入り登録ありがとうございます。

## 第二問

Aクラスの扉を開けてみるとそこにはまるで高級ホテルの様だった。

「高級リクライニングシートに個人パソコン。ちょっとやりすぎじゃない？」

「僕もそう思うよ。なんで一人一人に個人冷蔵庫があるのさ」

「ワシもこれはちょっと…」

「でもなんでここまでする必要があるのかな」

「たぶん、この設備目当てに勉強する奴狙いだろう。まあ、このクラスにこうして四人で来れたからもう勉強する気はないけどな」

「そんな事言っていないでちゃんとしなさい」

まあ本当は試召戦争をしたかったがAクラスでは無いだろうし、せいぜいこのメンツでの学校生活を楽しむとするかね。

「みんな席が離れちゃうけどまあしょうがないか」

「そうね、でも同じクラスなだけましじゃない？最悪あなたとウチの愚弟はFクラス行きだったかもしれないし」

「まあそう言ってるなや優子。秀吉だって好きな演劇には俺たちですら負ける程夢中になれるし、明久だっていざという時の集中力と行動力は目を見張る物があるぞ」

「そう言ってくれて嬉しいのじゃ」

「よしてよ拓馬。照れるよ」

「まあ俺にも誇れる物があると思いたいかな」

そう言っただけは大型のボストンバッグからとあるライフルを取り出す。あ、言っておくがエアガンだからな。

「またそんな物持ってきて。アンタよく懲りないよね。何回没収されてるのよ」

「ていうか、ここはAクラスだし、あいつらが襲ってくる心配はないと思うけど」

ふん、やっぱり明久は甘いな。

「それでも備えあれば憂いなしと言うだろう。それに銃は俺のアイデンティティを構成するものなんだよ。これが無かったら俺は俺じゃない」

そういつて俺は銃の整備に没頭する。ちなみに俺の好きな銃はM1ガーランドだ。今整備しているのもガーランドだ。トンブソンもBARもいいと思うがやっぱりガーランドが一番だ。

「それでは皆さん席についてください」学年主任の高橋先生だ。学校内では高橋女史と呼ばれてたりする。

「こうなったら拓馬は誰の言うことも聞かないから席に戻ろうか」

「そうね」

「うむ、そうじゃな。こやつがこつなったら何も聞かぬし、席に戻ろうかの」

「それでは廊下側から自己紹介をして下さい」

## 第二問（後書き）

ちよつと切り方が悪いが気にしたら負けだと思っている。

わからない所はググってください。

この物語を読んでいる皆様をお願いします。

うp主は皆様の意見をものすごく待っています。「こうした方がいい」だとか、「この小説はマジないな」とか、そういう意見でもいいです。とにかく、積極的に感想や意見を言ってもらえるとありがたいです。

あと、アンケートをとりたいと思います。秀吉とくっ付けるオリキヤラを考えているのですが、性格が決まってません。次の三つの内のどれがいいかを感想にてお答えしてもらえると幸いです。

- 1、ツンデレ
- 2、天真爛漫的な（具体的に言うと超電磁砲の佐天みたいな）
- 3、ロリキヤラ

### 第三問

「…くま、拓馬！」

「あつ、悪い明久、夢中になりすぎた」

「まったく、拓馬の番だよ」

はあ、俺の番か。俺的にはこの四人と過ごすだけでいいから自己紹介は必要ないと思うがなあ。

「石井拓馬だ。その明久と優子と秀吉は俺の幼馴染だ。以上」

そう言つて座ると周りから妬みの視線が俺に突き刺さる。はつきり言つてこれはちよつとムカつく。

「ああそうだ。明久、優子、秀吉に手を出す奴は…」

そういつてさっきの銃を取り出し、「潰すから(ニコツ)」

これで手を出す奴は居ないだろう。ふん、計画通り(キリツ) さて、せつかくこつちに意識を戻したんだし、他の奴の自己紹介でも聞くか。つて、次秀吉じゃん。て言うか、みんな俺の近くじゃん。

ふむふむ、秀吉が俺の後ろで明久が俺の前でその横が優子と。つて優子は何でわざわざ明久の隣にしたんだ？ああそうか、優子は明久の事が好きなのか。今度聞いてみよう。

「わしは木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。特技は…」 「声帯模写だ」 わかつてはいるが、秀吉の声帯模写似すぎだろ。鉄人の声とか。

「ちなみにわしは男じゃから間違えるでないぞ」 秀吉つて中性的な顔立ちしてるから姉の優子よりも告白が多いんだよな。主に男からてか、あいつ女子から告られた事あるのか？まあ、その内あるだろう。多分…。ま、もう聞きたい奴もいないし、続きをするか。

そんな事してる内にお昼になつちまった。いやー時間たつの速えーな。さて、アイツらと昼飯でも食うかな。て、思えば近くにメンツが全員そろつてるっていうね。まったく便利な物だ。

「明久に秀吉、それに優子にその…」



「工藤だよ。工藤愛子。そついう君は…確か石井君だったね」

「ああ、そつだ。お前も一緒に飯食うか？」

「えっ、いいの？」

「ああ、いいさ。お前等もいいよな？」

「ええ、いいわよ」

「うん、拓馬がいいなら僕もいいよ」

「そつじゃな、人数は多い方がいいからのつ」

「だそつだ。工藤、一緒に飯食うか？」「うん。なら、そつさせて

もらうね（ニコッ）」

か、可愛い…」

「拓馬、ニヤけてるわよ」ハッ、俺としたことが、なんとという失態。

「それにしても、石井君「拓馬でいい」拓馬君優子にもてもてだね」

「別にそんな事言われても別に動じたりはしないぞ」

「なんで？」「だつて優子に中学生の時告つたら「アタシ好きな人

がいるから無理」って断られたから。ま、誰かはだいたい判つたが

な。それより、飯喰おうぜ」

**第三問（後書き）**

切り方がアレな気もする。

#### 第四問（前書き）

投稿遅れてすいません。

オリキャラの案はまだまだ余裕がありますので感想にて言ってくださると恐縮です。

## 第四問

「まずは全員弁当の準備だ。持ってきていないやつはいるか？」

「ボクは今日学食に行こうと思っていたからもってきてないかな」

「そんな工藤には俺特製の弁当を分けてあげようジャマイカ」

「えっいいの？」

「味は保証済みだ」

「じゃあ頂くね」

パクツ「おいしい。てか、拓馬君料理も出来るんだね」

「明久直伝の味だ。まずい訳がない」

「そうなんだ。という事は、吉井君も「僕も明久でいいよ」明久君も料理出来るの？」

「そうよ。このアタシが味を保証するわ。で拓馬、アタシの弁当食べてみない？」

「そうだな」パクツ ガタガタ

「拓馬君どうしたの!？」

「はあ、やっぱり直ってなかったのね」

「そんな事言つてないで早く救急車をよんで！」

「えっ、まさか、やりすぎた！」あれ、おかしいな。だんだん意識が…バタツ ピーポーピーポー

「知らない天々」拓馬君！？起きたの！？」

「なあ愛子。人のセリフは最後まで言わしてくれ。で、俺が倒れたのは確か優子の弁当が辛すぎるのと苦過ぎるからだった筈だが、その後なんかあつたか？」

「うっん、特にはないよ」

「なら、ちょっと寝さしてもらおうわ」

「拓馬君」

「なんだ」

「もう心配かけさせないでよね」「このふくれっ面、マジ可愛い。」

「ちょっと拓馬君、話聞いているの？」

「ああ善処はするさ。じゃあおやすみ」

「うん、おやすみ（ニコッ）」「やべ、マジ笑顔可愛すぎるだろ。原則だ反則。そして俺は眠りについた。」

その二日後、霧島からメールが来た。なんだろうと開けてみると「成績を教えて」これだけ。寂しすぎるだろ。まあ得点を教えたよ。隠す程じゃないしな。ま、今日退院できるし。」

さて、退院まで銃の整備でもしてますか。

#### 第四問（後書き）

オリキャラの順位は、一位：2

二位：1、3

となっております。皆様の回答をお待ちしております。

今後、禁書目録からキャラを持ってくる予定です。  
それでは。

**第五問（前書き）**

ちよつとシリ阿斯。



## 第五問

そして俺は教室にきたんだが「拓馬君、Cクラスが戦争を仕掛けて来たよ！」

来て一番戦争ですよ。やったね。マジ嬉しい。

「でも開戦理由が優子がCクラスを豚発言したらしいんだけど」

何、こいつは聞き捨てならないな。

「優子がそんな事を言う筈がない」

ていうか、さつきから視線を感じるんだが。そういつて探していくと、秀吉の視線だった。ふむ、あの目は何かやましい事や後ろめたい事がある目だな。聞いてみるか。

「秀吉、ちよっと二人だけで話しあおうか」

「う、うむ」

「ところで秀吉、お前何かされたのか？」

「い、いや、特には」

「隠すな。別に怒ったりはしないから」

「そ、そうか。…ワシは悔しいのじゃ！Aクラスを貶めるような事はしたくなかったのじゃ！でも、雄二がワシに「男だったら友達」の

頼みぐらい聞いてくれるだろ？」など言ってくるのじゃからワシは聞かざるを得なかったのじゃ。ワシは…もう皆に会わせる顔がないのじゃ」

なるへそ、そういうカラクリだったのか。

「秀吉、心配すんなって。別にクラスの奴らはお前の事嫌ったりなんかしねーよ。ただし、優子と霧島には事情を話すがな」

「う、うむ、判ったのじゃ（グスツ）」

「おいおい、男なら泣くなって」

さて、坂本を本気でボコすとするか。ついでにFクラスも。

優子たちに事情を話すとFクラスと試召戦争をすると言ってくれた。

そして、開戦一時間前

「では、作戦会議をはじめるわ。まず、突撃隊の隊長に石井。副隊長に吉井。10人をつけるわ。次に、遊撃隊。これは、攻めてきた敵を潰す第一次防衛線よ。これには、愛子が隊長で、保体の得意な子を10人つけるわ。残りの皆は近衛部隊。では、以上。解散。拓馬、吉井、期待してるわよ」

「ふん、俺一人で潰すさ。今回はいつになくキレてるからな」

「僕もだよ」

キーンコーンカーンコーン。

開戦の狼煙が今上がった。

**第五問（後書き）**

おかしい所があったら教えてください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1588z/>

---

バカと軍事オタクと召喚獣

2011年12月11日19時52分発行